

鳥取県和牛改良方針

平成16年1月9日付畜第865号

鳥取県農林水産部長通知

1 改良目標

(1) 種牛能力

鳥取系の特性である増体性、繁殖性（連産性、哺育性及び飼いやすさ）等を堅持しつつ、更にその改良を図る。

(2) 体型（表現型）

前駆の充実と腿の改良が特に必要であり、発育、体積についてはその維持に今後とも努める。

繁殖雌牛（成雌）の体型目標は、下表のとおりとする。

雌 (成熟値)	体重	体高	体長	胸深	かん幅	栄養度
	490kg	129cm	156cm	69cm	48cm	5

(3) 産肉能力

最重点の改良目標はロース芯面積と脂肪交雑との2枝肉形質とし、枝肉重量についても引き続き改良に努める。

改良目標値は、下表のとおりとする。

目標 (10年後)	区分	現状	改良量	目標
	ロース芯面積	49.1 m ² ± 7.8	+1σ程度	55 cm ²
脂肪交雑	4.6 ± 1.7	+1σ程度	6以上	
枝肉重量	467.6 kg ± 54.3	+0.2σ程度	475 kg	

2 改良目標を達成するための手法

(1) 体制の整備

繁殖雌牛の個体台帳を整備し、その育種価、表現型評価、繁殖成績、子牛セリデータや肥育データ及び計画交配等の情報の一元化、共有化を図る。

(2) 雌牛の改良

ア 種牛性

産肉性至上の改良が進められたため、分娩間隔が長くなるなど種牛性の後退が一部で見受けられる。今後は種牛性を客観的に評価するためのシステムを開発するとともに、そうした観点からの改良も併せて行い、種牛性の回復に努める。

イ 産肉性

- (ア) 県外肥育された県内産和牛の枝肉情報の収集に引き続き努め、育種価判明率と正確度を更に高めるとともに、最優先改良目標である枝肉2形質の育種価の高い個体を後続雌牛として県内保留する。
- (イ) 遺伝子解析を活用した育種改良システムを早急に開発し、産肉能力を子牛段階で正確に把握し、選抜・保留の指標として用いる。
- (ウ) 肉の旨味に関する遺伝子検索を行い、その遺伝子をもつ系統の育種・改良への活用を検討する。

ウ 遺伝的改良量とその速度

- (ア) 遺伝的改良量を大きく、改良速度を早めるため、鹿児島、宮崎県等から鳥取系血量を保有した雌牛を導入し、雌牛集団の改良に活用する。
- (イ) 兵庫系血量は、前述した2形質の改良に必要な因子であるものの、体積があり、増体制の高い系統のものものの活用を検討する。

(3) 種雄牛造成

ア 改良基礎雌牛

- (ア) 改良の基となる改良基礎雌牛を指定し、計画交配を行う。
- (イ) 改良基礎雌牛は、改良目標とする形質の育種価により選抜するほか、血統、体型(表現型)及び将来的には遺伝子も併せ、各形質毎の母牛群を構成する。
- (ウ) 高等登録牛は、初回分娩月齢、分娩間隔、表現型及び子牛の審査点数など種牛性並びに産肉形質の育種価が優れたものであることから、これら母牛群の一翼を担う形で指定し、改良に供する。

イ 計画交配

- (ア) 計画交配する種雄牛は、本県基幹種雄牛のみならず、目標とする形質の改良が可能であれば、県外種雄牛も活用する。
- (イ) 改良基礎雌牛の指定は必要最小限とし、造成のための計画交配に対する補償制度を充実するとともに、早い世代での産子により種雄牛候補選抜を行う。
- (ウ) 計画交配により生産され、種雄候補牛として選抜・保留されたものは全て広域後代検定に供する。

ウ 指定交配

後代検定のための試験種付けは、相性適正の観点から雌牛側の血統構成など選定基準を設定することを検討する。

(4) 鳥取系固有遺伝子の維持

- ア 全国的に特定系統の種雄牛に交配が集中し、集団の遺伝的多様性が失われつつある。
- イ 本県は繁殖雌牛飼養頭数が減少し、セリ上場頭数規模も小さいことから、全国から購買者を誘致するためには、鳥取系固有の遺伝子を維持する必要がある。
- ウ 鳥取系が全国的に再評価されつつある近年、鹿児島、宮崎県等県外の鳥取系統にない、比較的独自性の強い、例えば「東豊系」や「第2気高系」の雌牛を維持、増殖することを検討する。

(5) 組織づくり・人づくり

- ア 地域の和牛改良を推進するため、その根幹となる和牛改良組合の組織の充実を図ると、ともに、各機関が協力して技術研修や情報提供等の積極的な支援を行う。
- イ 農家に対し直接和牛改良を指導する立場にある農協営農指導員に対しても、各機関が協力し、技術研修の場を積極的に提供し、その知識の習得と技術の研鑽に努めるよう誘導する。
- ウ 県地方機関については、和牛振興に対する役割分担を明確化し、農家指導を行う。